

家族の将来

～人口減少時代の家族とは～

The Future of Families: The Nature of Families in an Era of Population Decline

三菱UFJリサーチ&コンサルティングでは、2010年度より、弊社の研究員およびコンサルタントの基礎的教養を高め、クライアントに対してより魅力的で洞察力のある知恵の提供ができるようになることを目的に、「学び」の場として『巖流塾』を開催しています。

この目的を達成するため、『巖流塾』では表面的な知識やスキルを習得する場所としてではなく、物事の実体、本質に迫ることができるようなテーマを用意し、自己鍛錬、塾生同士の相互研鑽の場を提供することを目指しています。

2013年度においては、『巖流塾』の活動テーマを『100年後の日本～縮小国家・日本に将来はあるか～』と設定し、急速な高齢化の進展、人口減少社会の到来が確実視されるなかで、100年後の日本の姿を想定し、どのようなパラダイムの転換が必要か、日本がとるべき戦略・政策とは何か、等について構想していくことを目指しています。

そして、外部から有識者を講師としてお招きして、有識者の方々とのディスカッションを軸に、あるべき日本の姿についての検討を進めることとしています。お招きする有識者の第3弾として、中央大学文学部教授・山田昌弘氏に、「家族の将来～人口減少時代の家族とは～」と題した講義をお願いいたしましたので、ここに講義録を採録いたします。



Since 2010, Mitsubishi UFJ Research and Consulting has offered the company's researchers and consultants learning opportunities through the Ganryu Seminar to enhance their basic knowledge and enable them to provide interesting and insightful ideas to clients. To achieve this goal, the Ganryu Seminar is intended to be not merely a place for acquiring superficial knowledge or skills, but also a place where the participants can learn from each another as well as train themselves by engaging in themes that are connected to the reality and essence of issues.

In 2013, the theme for the Ganryu Seminar is "Japan in 100 Years: Does Our Shrinking Nation Have a Future?" With the country gripped by rapid population aging and population decline, the goal of the seminar is to imagine the situations that Japan will face 100 years from now and to discuss ideas regarding, for example, what kinds of paradigm shifts will be necessary and what strategies and policies should be pursued over this period. Experts from outside the company have been invited to lecture, and the seminar participants can further their ideas about an ideal Japan through discussions with them.

Included in this issue of the journal is content from a lecture entitled "A Summary of The Future of Families: The Nature of Families in an Era of Population Decline" given by Masahiro Yamada, Professor at Faculty of Letters, Chuo University, the third invited lecturer at the Seminar.

Part1：講義

はじめに：「人口減少社会」に関する誤解

中央大学の山田昌弘です。

昔、ある女性の官僚の方と話をしたときに、「山田先生は顔で得している。山田さんは顔がニコニコしている。ニコニコしているから、暗い話もスーッと聞けてしまう」と言われたことがあります。というわけで本日もあまり明るくない話をしますが、よろしくお願いいたします。

たとえば、私は授業の時も「ここに君たち100人の受講生がいます。ただし、国立社会保障・人口問題研究所の予測だと、うち25人は一生結婚できませんよ。また、結婚する75人のうち、現在の離婚経験率は38%ぐらいですから、だいたい25人は少なくとも1回は離婚する計算になります。つまり、この教室にいる人のうち、結婚して、かつ離婚もしないで一生送る人は、2人にひとりなんだよ」というようなことを言って、学生に感想を聞くと、「山田先生の授業の後、気分が暗くなって帰った」という感想が返ってくるわけです。このように、あまり明るい話はしないというのが私の役目と思っています。

さて、パラサイトシングルについても、親と同居して楽しく生活しているような人が多かった時代では明るい話なのですが、ではその後どうなるのという話をすると、急に展望が見えなくなりますし、婚活も同様ののですよね。私が「婚活」という言葉をつくって5年目なのですが、それでそろそろ総括をしようと言って「婚活症候群」という本を書いたのです。けれども、今のような状況ですから、婚活すれば結婚できるほど楽観的な状況ではないと書いてあるのですが、なかなかそうは理解してくれないのが世間というものですね。「婚活をつくり出したおまえがいるから、婚活で苦しむ人がいるのだ」と言われてしまうのです。格差社会もそうですね。「私が格差社会をつくっているわけではないのですよ」と言うのですが、言葉の力というのいろいろあるようです。

まず家族に関してですけれども、ご承知の通り、日本では人口減少社会となっています。このうち「少子化で人口減少が始まる」という点については、2つの誤解があります。たとえば、「少子化」と言ったときに、現在の合計特殊出生率は1.4、すなわち女性が平均して子供を産む数が1.4人ですから、「では、ふたりっ子の世帯またはひとりっ子の世帯がふえているのだな」と思われるかもしれませんが、現実はそのようではないのです。結婚している女性はだいたい2人の子どもを産んでいるのです。つまり、結婚して2人の子どもを産む人と結婚せずに産まない人を平均すると、たまたま1.4という数値になるだけであって、平均的に1.4人が出生するわけではないということです。

また、家族数が平均的に減っているわけではないのです。私は、データをもとにどういう家族がふえて、どういう家族が減っているのかということを詳しく調べているのですが、後でもお話ししますが、直近の日本では母子家庭がふえているのです。ただし、母子家庭として一般にイメージされるのは、たとえば30歳ぐらいの女性が5、6歳の子供を育てているというイメージではないかと思います。そういう母子家庭もふえていないわけではないのですけれども、今、統計的にふえているのは、たとえば70～80歳の母親と40～50歳の息子または娘と一緒に住んでいるという母子家庭です。つまり、もともとは核家族であったものが、お父さんが死んでしまって、子供が結婚しないでそのままいるという形の母子家庭がふえているわけです。だから、母子家庭の統計においては、どちらの母子家庭のことかということをはっきりさせなければいけない、という主張を私はしているのですが、そこら辺についてはなかなか分かってもらえないのです。この事例のように、あらゆるものが平均的に縮小すればそれは大した問題ではないわけなのですが、実際には家庭のあり方も平均的に変化しているわけではないのです。

別の表現をすると、格差をとめない、多様化、リスク化、不確実化していくというのが今後の家族のあり方で

す。ここで言う多様化とは2つあって、「共時的多様化」と「通時的多様化」です。

この「共時的多様化」とは、同じ30歳となったときに、ある人はひとり暮らしをしているし、ある人は親同居未婚だし、ある人は夫婦だけで暮らしているし、といったような多様化のことです。

また、離婚して母子家庭が親元に戻るという「親同居ひとり親」のケース、つまり祖父母と母親とその子供という世帯が今はふえていて、実は震災でその事実があぶり出されたのです。でも、災害復旧においては、そもそもそういう家族があるということを想定しないので、避難住宅とか仮設住宅において家族をばらして入居させるしかないのも、それで結構もめる等という話もあります。実はこの「親同居ひとり親世帯」は東北地方に特に典型的な家族形態なのです。正確に言えば東北地方のほか、九州、沖縄等、「できちゃった結婚」率が非常に多い地域に典型的な形態です。

その他、きょうだいだけで暮らしている「きょうだい居住」の世帯も実はふえていて、特に男同士の兄弟で住んでいる割合がふえています。たぶん、親が亡くなった後、男兄弟が未婚のまま残されたのではないかと推定しています。

もちろん、通時的にも多様化が起こってくるわけです。私は離婚を研究していたときに、7つの家族形態を5年の間に駆け抜けた女性のインタビューをしたことがあります。具体的には、親と同居、ひとり暮らし、結婚して夫婦に、子どもが産まれたけれども、離婚して親元に戻ってきて親同居ひとり親になって、しばらくして自立してひとり親になったという変化です。この事例のように、たった5年のうちに7つの家族形態を駆け抜けてしまう人もいるわけですね。

離婚については、経済的理由、つまり夫が失業したりリストラされたりしたので生活できなくなって妻が見切りをつけるという形の離婚がふえているのです。離婚についての調査をしていたときに、「私の結婚相手が結婚式の1週間ほど前にリストラされたのです」と言う人に出



会いました。そして、「それで何が大変だったと思いますか」と聞かれたので、「それはまあ、結婚後の生活のことが心配だよね」と答えたところ、「そうじゃないのです。職場結婚だったので、結婚式の招待客を全取り替えしたのです」と言うのです。つまり、仲人は職場の上司で、周りの招待客も職場の人だったのです。まさか元上司の人が、「何々君は有能だったのですけれども、やめてもらいました」と言うわけにもいかないでしょうからね。「では何で結婚をやめなかったの」と訊いたら、「おなかの中に子供ができてしまっていたので、結婚をやめるわけにいかなかったのです」という話でした。そして、1年ぐらいい一緒に住んでいても旦那がなかなか就職できなくて借金をしてしまったので、もう業を煮やして生まれた子供を連れて親元に帰ったということです。その後は、私がよく話しているように、パラサイトシングルではなくて、「パラサイトディボース（離婚）」となって、「引退していた父親が私と孫を養うために再就職して働き出してくれたのです」とのことでした。私は、「そうか、60歳ぐらいの男性の方が30歳ぐらいの男性よりも再就職しやすいのだ」と思ってしまいました。それでしばらくして、その人は自立して、今は親子2人で暮らしています。「ボーイフレンドもできました」というので、まあ明るい話なのですが、そこでインタビューは終わったのですが、もしもその人が再婚をすれば、さらに「ステップファミリー」という再婚家族ができることになります。

21世紀の日本家族

21世紀の日本の家族は、多様化しているというよりも、典型的な家族をつくり保てる人と、そうではない人への分裂が起こり始めているのだと思っています。実は、典型的な家族生活の中身はあまり変わっていないのです。中身は変わっていないとすると、何が変わったのかというと、それを形成・維持ができる人と形成・維持できない人に分裂してきて、かつそれが事前に予測ができないのだということです。つまり、今の若い人にとっては、将来の家族生活がどうなるかということはリスク化し、不確実化しているのだということです。

一方で、意識的には伝統的家族への回帰が強まっています。内閣府の調査でも若い人の間で専業主婦志向が強まっているという結果が出ていました。社会学の世界では、2000年ぐらいから「伝統的家族がいい」という若い人がどんどんふえてきているというデータが蓄積されています。

そのような伝統的家族を望んだら与えられる、ということであればいいのですけれども、望んでも実現できなくなっているのが最近の現実です。さっきも言ったように、今の20代、2050年の60代ですけれども、彼らの生涯未婚確率は25%、離婚経験率は35%、という予測となっており、結婚してかつ離婚もしない人は2人にひとりだけなのですね。

まず離婚についてですけれども、おおむね平成に入ってから離婚率が伸びています。世界的に似たようなことが起こっていて、先進国の離婚率はだいたい2分の1から3分の1で安定しているのです。中国もシンガポールも韓国もロシアも離婚率は高くなっていますけれども、やはりだいたい3分の1から2分の1ぐらいまで急上昇した後、それほど変動がないというのが現実です。ちなみに今、離婚数が減っていますが、これは結婚数が減っているためです。離婚は、初期故障といいますが、結婚してから5年以内の離婚が多いので、結婚する人が減ると離婚も減るのですね。

この前、海外の文献を読んでいましたら、だいたいの国において理想子供数は2人台で均衡しているというのですね。ひとりっ子政策をしている中国でも、理想の子供数は2人がいいということです。また、少子化が始まっている国でも昔は成人まで育つ人が少なかったので4人とか5人も産んでいましたけれども、今はだいたい2人とか3人とか答える人が大部分です。子供をだいたい2人から3人産みたがるというのが、近代人の状況のようですね。

でも、現実には未婚率がどんどん上がっており、30歳から34歳の未婚率は男性47.3%、女性34.5%、となっています。つまり、30代前半の男性は2人にひとり、女性は3人にひとりが結婚していないのです。

ところで、日本は家族についての選択肢が非常に少ない国です。海外では同棲とか未婚の母とか増えていますけれども、日本ではここ5年ぐらいの間に同棲する人は減っています。だから、現代の若者は多様な家族形態を望んでいるのではなくて、いわゆる今までの形の結婚をするか、結婚をしないでひとりで独身または親と同居しているか、そのどちらかが日本では多数派なのですね。

戦後型家族の形成

ここから家族社会学の話をします。

「近代社会」というものを考えてみますと、「家族」と「国家」を二大単位として構成されている社会、というのが私の「近代社会」の定義です。近代以前は「国家」という境界はすごく曖昧でし、実は「家族」という境界もすごく曖昧だったのです。たとえば、死亡率が高いですから、親が亡くなってしまいうことも多く、その場合は子どもたちは親戚の家に預けられたりとか、または、庶民の家で生まれたら「おしん」の世界のように丁稚奉公に出されたりしたのです。このように、子どもが多くても困るので、実は「家族」の境界は曖昧だったのです。

繰り返しとなりますが、近代社会というものは「家族」と「国家」というものを二大単位として成立していたわけですから、グローバル化によって国の間が揺らぐ



とともに、家族の境界をどうするかという点が、大問題として今後起こってくるのだと思います。

ところで、私は学生に意地悪な質問を出したことがあります。「あなたに兄弟または姉妹がいるとして、兄弟の配偶者、つまり義理の兄弟または姉妹が借金をしてしまい、もう生活できないという状況になったときに、あなたはその義理の兄弟・姉妹の面倒を見たり、借金を返してあげたりできますか」という質問です。

この質問に追加して「自分のきょうだいの子供が大学に行けなくなっても助けるか」と言ったら、学生たちはまだ20歳ぐらいですから、現実にはそれができかどうかはともかくとして、「助けたいと思います」と答える人が多いですね。

ただし、この質問はだんだん冗談では済まなくなってきたような気が私はしています。つまり、結婚していない人がふえると、将来のその人の介護をだれが面倒見るのだらうという問題にもつながるのです。もしかしたらその人にとっての姪や甥が面倒を見るようになるのではないか、という問題が起こっているのですね。つまり、今までは家族というものは、みんなで助け合うという関係が成立していたのですけれども、マイナスの面が出てくると家族はどうなるのか、ということです。

ところで、ゲイのカップルを研究している弟子がいるのですが、この弟子は同性愛で一緒に住んでいるカップルに「パートナーが病気になったとき、手術代を出したり、看病したりできますか」という意地悪い質問をイン

タビューしたりしているのです。夫婦とか親子なら自分の貯金をはたいても家族のために何かをするかもしれないけれども、「ゲイのカップルがそれだけ強い愛情で結ばれているのか」と訊いたら、その弟子は「助けるカップルもあると思いますし、別れてしまう人もいるかもしれませんね」というような話をしていました。

話は戻りますが、家族はお互いに生活保障を行うものなのですが、今は、だれを家族としてだれを家族としないかということが少し揺らぎ出しているのですね。一方で、今の学生も、家族がいれば人並みの生活が送れるはずだと思っているし、いざとなったときには家族は助けてくれるはずだと思っているのですね。さらに、家族がいれば寂しくないし、居場所があると思っているのです。逆に家族がない状態というものは、いざとなったときに自分を世話してくれる人がいるだろうか、いくら稼いでいても、もしも病気になってしまったとか、または勤めた会社が失敗してしまったとかいったときに、だれか自分を親身になって世話してくれる人がいるかどうかと学生でも心配になるのです。学生の中には、「結婚しなかったら将来、一緒に住もうね」と約束している友達同士もいるのですけれども、それはあくまでも友達関係ですから、一緒にいれば寂しくないかもしれませんが、居場所というようなものにはなりません。

さて、戦後家族というものは、「夫は主に仕事、妻は主に家事で、豊かな生活を目指す」というものでした。豊かな生活の中身は、住宅とか家電製品とか子どもの教育とか家族レジャーとか、そういったものが中身だったのです。かつて大手広告代理店と一緒にコラボで調査した時に、高度成長期の家族についてインタビューをしたことがありました。高度成長期は家庭に何もなかったところから右肩上がり始めて、夫の収入は上がっていったので住宅は次々と広いところに住み替える、新しい家電製品が出たら買ってテレビの前で家族団らん、子どもは学習塾に通わせる、そして遊園地等に年に一回連れていく、という時代でした。こうした中で当時は、「豊かな家族にはこういうものが要だ」という広告を打てば、モ

ノはあっという間に売れたわけですね。

私の知り合いの研究者で遊園地の研究をしている人がいます。その研究者によると、戦後の高度成長期には全国で小さな遊園地が山のようにできたとのこと。そうした遊園地には、観覧車があって、ジェットコースターがあって、その他温泉施設等があって、そこに年に数回行って家族で楽しむ、ということが豊かな家族の象徴だという時代があったのですね。今はディズニーランドのひとり勝ちですけれども。そのような家族では、いわゆる性別役割分業、つまり、男が主に仕事、妻は主に家事が原則で、家計の収入は男性に依存していたわけです。

ただし、そのような戦後型家族が成立するためには条件があって、ひとつはライフコースが社会的にも個人的にも予測可能だったということです。これが非常に大きな条件だったわけです。かつては、ほとんどの若者が結婚して、しばらくしたら子供が生まれ、夫は仕事ですつと行くのだというふうに予測できたのです。その前提としてほとんどすべての男性（夫）が定職についており、その収入は安定して上昇する見通しがあったわけです。それは、男性つまり夫が正社員または保護された自営業者であったということです。

ところで、今の70歳半ばの人はすでに亡くなった方も含めて97～98%の人が結婚しました。ちなみに、今の70歳の人のうち離婚経験者はだいたい10%ぐらいです。つまり、まったく家族なしで今に至ってしまったという人は全体のわずか2～3%です。一方で、NHKで報道された無縁死は3万2千人でしたが、これは今の高齢者の未婚率の数字とほぼイコールなのですね。

実は、社会学の中でも自営業の研究はすごく遅れていて、農家の研究はあるのですが、たとえば酒屋とかたばこ屋とか、いわゆるアメリカで言うパバママストア的な小さな自営業についての研究はほとんどなされていません。いずれにしても、日本では自営業は保護されていたので、収入が上がり、広い住宅を購入したり、子供の教育に充当したりといったことができたわけです。つまり、高度成長期はほとんどすべての若者にこうした

生活が保障されていたわけです。

最近の短大や高校では、将来の資金計画も含めて自分はどういう生活を送るのか、ということについて講義する「生活設計」という講座があります。私の友達がある女子短大でこの「生活設計」を教えており、その授業で自分の将来像について書かせたそうです。そうすると、だいたい20歳半ばぐらいまでに結婚して、30歳までに子供2人を産んで、30歳ぐらいで家を買って、子供が大学を出た老後は悠々と暮らす、というふうに書いてあるそうなのですね。私は意地悪ですから、「夫だけの収入だけで暮らせる女性は10人にひとりですよ」と言ってしまうのですが。でも、地方の短大だと、周りの男を見てもそれなりの収入を稼げる男はいないということが分かるわけですよ。では、こうしたことが分かっている人は、自分の将来像をどういうふうに書くと思いますか。私は、回答のコピーを見せてもらったのですが、50人ぐらいのクラスで6人が資金計画のところに「宝くじ当たる」と書いてあるわけです。ある人は30歳のときに宝くじが当たって一戸建てを買うことになっていますし、別の人は、宝くじが家を買うときと老後と2回当たると書いてあるわけですね。いい男が周りにいないということが分かっているから、宝くじに頼るしかないのかなと私は思いました。

まとめますと、少なくとも戦後社会では夫の収入が「予測可能」だったから、どのような家族になるかも予測は可能だったわけですね。

格差社会と家族のリスク化

かつての高度成長期は楽だったのですよ。親世代はほとんど農家でそれほど収入は上がらないのだけれども、都会に出ていくとサラリーマンになれましたので、親以上の学歴、収入を見込める若い男性がたくさんいたわけです。戦後の高度成長期の始まったぐらいのころ、1950年とか60年ぐらいまでは、結婚した時点で自分の父親よりも夫の収入が高かったというケースも結構あったと聞いています。でも、今はほとんどあり得ないですね。

成熟期になってくると親世代も学歴が高くなり、ある程度の収入を得るようになりました。そして、オイルショック後の低成長期に男性の収入の伸びが鈍ってきます。このことが家族に与えた影響は、晩婚化と共働き化です。晩婚化については、だいたい1975年頃から結婚しない人がふえてきたわけですね。女性は自分の父親と同等かそれ以上のレベルの男性と結婚しないと、自分の生活が落ちてしまいますから、付き合っている相手の収入が高くなるまで、または収入が高い男性と出会うまで結婚しないで待つことになります。

というわけで、この辺で実は未婚化、結婚難問題があらわれてきたわけですね。1990年頃の晩婚化の論文や調査研究を見ると、結婚が不利で未婚率が高いという三大カテゴリーがあって、それは僻地の農家の跡継ぎ、零細自営業の跡継ぎ、中小企業の労働者、です。

私は、全国消費実態調査を分析する中で、女性がフルタイムで働くと高額消費がふえてきて、パートタイムで働くと、専業主婦家庭とほとんど消費項目は同じなのだけれども、教育費だけが突出して高くなるというデータを分析したことがあります。女性のパート収入はほとんどが教育費に消えているわけですね。つまり、その一部は私の給料になっているのですね。

一方で、みなさんの周りでは、キャリアで働いている女性がふえているというふうに思えるかもしれませんが、既婚女性の正社員は、実は男女雇用機会均等法ができたにもかかわらず、実はほとんどふえなかったのですね。というのは、かつては結婚・出産しても働き続ける女性の半分ぐらいは公務員と教員だったのですけれども、公務員と教員の採用が減ると同時にキャリア、一般企業での働き続ける女性もふえたので、それがオフセットして、実は正社員同士の共働きの割合はほとんどふえていないのですね。

その後1980年から90年ぐらいまで、「豊かな生活を目指す性役割分業の家族」という基本は崩れていないのですが、私が言う「パラサイトシングル」、すなわち親同居未婚者が右肩上がりですね。最近では、さすが

に人口そのものが減ってきたので、親同居未婚者の数も減りましたけれども、率はふえているのですね。

1995年からは、格差社会が始まります。IT化とかサービス化とか、グローバル化が進む中で、職業が二極化していき、安定した正社員の職と不安定な職に分裂していきます。そうすると、男性収入の二極化と、その二極化した下の方の人たちの人生の予測不可能性が生じてきます。若年者の非正規雇用率がどんどん高まっていることも、言うまでもないと思います。一方で、新卒一括採用、終身雇用という労働慣行がまだ残っているので、結局、学卒時に正社員として就職できたかできないかが、将来の家族ができるかできないかということを決定的に分けてしまうという状況になってきたわけですね。

経済問題としての結婚

その結果、未婚化、離婚の増大が始まるわけで、「男性ひとりの収入では妻子の豊かな生活を支える見通しが立たない」という社会になってきました。そして、日本や韓国では男が主に稼ぐという固定的役割分担意識が特に残存していますし、かつ女性差別的慣行とか働きにくい慣行も残存していますので、ますます「男性ひとりの収入では妻子の豊かな生活を支える見通しが立たない」社会となっていくわけですね。こうしたことから、欧米との大きな違いですが、夫婦2人で稼ぐというかたちには日本はなかったのです。

その理由のひとつが、独身女性は親と同居して待っているケースが多く、親が生活と心理的保障もしてしまうので、理想の相手が現れるまで待てるということです。

もう10年ぐらい前の話ですが、50歳ぐらいのある地方の農家の奥さんとお話をしたときに、30代の未婚の娘さんがいるとのことでした。その農家の方は、「私は中学しか出ていないから、こんな農家に嫁に来るしかなかったけれども、私の同級生で短大まで行った〇〇ちゃんはお医者さんと結婚している。私は頑張ってるうちの娘に農作業もさせずに、お嬢さんに育てて、短大を出した。だから、うちの娘はいい家じゃないと嫁にはやらない」と

胸を張って言うのですね。私が「では、同じ農家の方と結婚するということはないのですか」と言ったら、「農家だったらお手伝いさんとかがいるところじゃないと嫁にやらない」というふうに言っていたことがありました。この農家の方は、自分の家だけ変化がしているわけではなくて、周りも全部変化しているということをなかなか理解されないのですね。つまり、かつては短大卒であればいいお宅に嫁に行くことができたかもしれないですが、世の中全体が右肩上がりの時代に、短大卒には特別な価値はもうないわけです。

私の調査ではないのですが、私の友達の研究者が見合いおばさん・おじさんの調査をしています。今は、お節介おばさんやお節介おじさんがいなくなったという以上のことが実は起きていて、そもそも自信を持って紹介できる男性がいなくなってしまったという状況になっているそうです。そして、いい人なのだけれども契約社員の男性をあるところに「お宅のお嬢さんとお見合いはどうですか」と勧めたら、「何でうちに正社員ではない男を見合いとして持ってくるのだ。うちをばかにしているのか」と言われてその家から絶交されてしまったというケースもあるそうです。また、あるお宅で「こういう人はどうですか」とお見合いを勧めたら、その母親が会社四季報をパッと見て、「あ、これ子会社じゃないですか。だめです」と言って突っ返えられて、そのお節介見合いおばさんが「もう二度と紹介してやらない」と言ったというケースもあったそうです。だから、若い人たち本人というよりも、親の世代の意識は全然変わっていないのですね。

2010年に明治安田生活福祉研究所が行った「結婚相手に望む年収と現実の未婚男性の年収の比較」という調査があります。結果は、女性の場合「400万円以上」という回答がもっとも多く、次いで「600万円以上」となっています。

私は、以前に行った同様の調査で「200万以上と答える人はいないでしょう」というふうに言ったら、弘前大学の先生が、「青森県では200万以上稼ぐのは大変なのです。だからその選択肢を入れた方がいいです」とお



っしゃるので選択肢に追加して調査をしたところ、確かに「200万以上」と回答する人がいましたね。

一方で、現実の20～39歳の未婚男性の年収は、200万未満が38.6%で、200万以上が36.3%となっており、結婚相手としての限界値と言われる400万以上稼ぐ男性は全体の4人にひとりしかいないですね。これはインターネットのモニターサンプルなので、極端な低収入者は入っていないはずだと思うのですが、これではなかなか結婚にならないわけです。

私は、内閣府での調査の際にも同じような設問を入れようとしたら、「そんなえげつない調査はできない」と言われて却下されてしまったのですけれども。また、オックスフォード大学でこの調査結果を発表したことがあるのですが、「日本の女性は年収何百万以上でなければ嫌だと本当に答えるのか」というふうに言われました。つまり、「給与を条件として結婚相手を選ぶということは、よっぽど特別な女性以外にいないはずだ。イギリス女性は心の中で収入が高い方がいいと思っていたとしても、絶対にそういうことを口には出さないのだ」と言われてしまいましたけれども、日本ではこういうことにしっかり答えてくれるのですね。

ところで、私が地方で未婚者のインタビュー調査をしていたときに、親同居のフリーターの20歳ぐらいの高卒の女性にインタビューしました。彼女が「前は彼氏がいたけれども、今はいない」と言うので、「では、どういう人と結婚したいの」と聞いてみると、「ごみの分別をちゃ

んとできる人」と答えるので、「何、それは」と聞き返したら、「前に付き合っていた彼氏はとにかくごみを散らかしっぱなしで分別しないので、見ていて恥ずかしかった」とのことでした。そして「ほかに結婚の条件は」と聞いてみたら、「借金をしない人」と答えるので、「そうだよ、サラ金などから借金する人は大変だよ」と言ったら、「そうじゃなくて、私から借金しない人」と言うのです。つまり、「前に付き合っていた彼氏は小遣いがなかったか言って私から借金してパチンコに行って、別れた後も返してくれない、だから今度付き合う人は絶対に私から借金しない人」とのことでした。少子化対策や結婚対策と言ったときに、官僚の方やマスコミの方は地方の高卒や高校中退の人のことをたぶん頭に入れていないのでしょうが、現実の状況はこうなのです。

もちろん、若者に結婚願望はあるわけですよ。しかし、結婚したくてもできないし、いつできるか分からないのが現実なのです。また、結婚の状態を続けていたくても、なかなか続けられないのです。世の中に、「結婚したくない」という人はもちろんいますけれども、さすがに「離婚したくて結婚する人」はいないと思いますから、離婚するということは絶対に想定外なはずですね。だから、この意味でも、自分のライフコースが事前に予測できない社会になっているわけです。

実はこの話は、最初に講演したときは住宅メーカーさんが相手の講演会だったので、今後の住宅のサイクルを考え直さなければいけない、というお話をしました。たとえば、あるところに30歳ぐらいのひとり息子と70歳ぐらいの母親と2人で住んでいる家がありました。その家がどんどんぼろくなってしまい、母親はそろそろ建て替えなければいけないと思っているようなのですが、息子が結婚したときに二世帯住宅に建て替えようと思って、頑張ってきたようなのです。でも、とうとう7、8年前に頑張り切れなくなって建て直して、今は80歳と55歳の母子家庭となっています。この話から、将来の家の建替えはいったいどうなると思われますか。

また、子供が生まれて家が手狭になったから、今まで

のマンションを売って家を建てた途端に、夫婦仲がおかしくなって離婚して、彼女が親元に帰って、今は建てたその家をどうするか、ということで大もめにもめている元夫婦がいます。

というように、いつ結婚するか分からないし、いつ離婚するか分からないのに、計画立てて住宅を建築することは果たしてうまくいくのでしょうか。アメリカでは、家を売ったり買ったり、貸したり借りたりということが極めて合理的にできるのでいいのですけれども、日本の場合はそこがすごくネックとなりますね。

若者世代における家族形成の分解

若年世代で経済力や魅力による階層分化が進行中です。

主に夫が働いて、主に妻が家事をして、ちょっと働いたりして子供を育てるという今まで通りの家族はずっと存続するのですけれども、その量がどんどん減ってくるのです。

また、夫婦フルタイム共働きの豊かさといったら、妻子を養える収入が2人分あるわけですから、子供を育てるころを乗り切れればこんな豊かな家族はないと思います。

ところで、男女共同参画会議に私が委員として参加していた時、「女性が社会進出してフルタイム就労がふえると、男性の小遣いが上がりますよ」と言ったら、サラリーマン出身の議員さんにやたらと受けましたね。

若年世代で経済力や魅力による階層分化の結果、典型的家族からはみ出る層も出てきます。たとえば、不安定既婚子持ち層です。ちなみに、今はできちゃった結婚は結婚数のだいたい5分の1くらい、沖縄だと46%、すなわち2人にひとりとなっています。今はもう少しあがっているかもしれませんが。沖縄は非正規の共働きがすごく多いのです。その意味は分かりますよね。本土だと非正規の男性は結婚相手に選ばれないですし、交際相手としても選ばれないので、結婚しないままにとどまるのですけれども、沖縄の出生率の高さは非正規男性が結婚してパパになっているからなのですね。沖縄の場合、自分の周りを見ても正社員といっても大して収入がない人が

多いので、非正規でも別に結婚してもいいではないかという感覚なのだと思います。県別データで見ると、できちゃった結婚率と若年失業率はほぼ相関します。若年失業率が高い東北地方と沖縄で、できちゃった結婚率が高く、東京や神奈川ではできちゃった結婚率が低いのです。もっとも、東京や神奈川ではできちゃった結婚の数自体は多いですが。結果的に親同居未婚層が残ってしまい、さらに今は、親にパラサイトさえもできない低収入未婚層がでてきているのが現実なのです。

一方、欧米では典型的家族はモデルではなくなりました。共働きや同棲が増大して、社会保障が下支えして女性が社会進出しているという状況がありますので、「男が仕事で、女が主に家事で一生連れ添う」というモデルは、「それはめずらしいな」と言われるか、「それを望んでも得られない」のどちらかなのです。そのことが分かっているのに、欧米の若者は別の生き方を求め始めています。欧米の家族はパラサイトではないので、原則として20歳ぐらいで家を追い出されてしまいます。そこで、ひとりでは生活できないので、同棲など共同生活するので。この状況は日本と逆ですよ。日本は親と同居しているからわざわざ同棲をしませんが、欧米では、「まあちょっといいかな」という程度で同棲したり、結婚してしまうのです。一方で離婚も多いですが。でも、それで2人の働きで食べていくというパターンができてきました。

また欧米では、恋愛率、同棲率が高く、離婚も多くても再婚も多い社会です。一方、日本では、ここ10年の間で未婚率が高まっていると同時に、ここ10年で恋人なし率も高まっているのです。また、ここ5年で若い人の間で性体験率が低下しているのです。特に男子高校生の性体験率については、2005年時点で20数%だったのが、2011年には10%にまで半減してしまったのです。これはなぜかという理由を高校生の調査をしている研究者が必死に探っています。1,000円払えばAKBと3秒間握手できるのに、隣の可愛くもない女の子を口説きたくもないと思っているためなのかどうかよく分かりませんが、

ともかくそうなっています。

若者の将来の生活が予測不可能になるということは、親にとっても辛いことなのです。私は、読売新聞の人生相談を担当していますが、実は若者の親からの相談が多いのです。就職できない、仕事をやめちゃった、なかなか結婚しない、私は心配で、心配でたまらないのです。つまり親の世代は就職も簡単だったし結婚も簡単だったのだけれども、自分の子供はそれがうまくいかないことにすごく悩んでいるわけです。

家族の将来

今、若年層は家族の格差や環境の格差が大きくなっているわけですが、これらの格差がついた若年層がどんどん年を取っていった中高年化していくというのが、これからの日本の姿なのですね。一番典型的なのがパラサイトシングルの高齢化で、2012年の段階で壮年（35歳～44歳）の親同居未婚者が305万人います。

この35～44歳の未婚者の推移を見ると、1980年以降は右肩上がりにふえていて、2010年では16%ですから、7人にひとりが未婚です。この前、大学1年生の学生に「君たちのご両親はいくつぐらいかな」と思って目の前の女子学生に聞いてみたら、「私のお母さんは40歳です」という答えでした。たしかに、昔の40歳であつたら孫がいても驚かれない年齢ですから、現在40歳のお母さんが大学生の娘を持っていたとしてもそれはおかしくないと思いました。私は55歳ですから、そろそろ孫の世代が入ってくるのかと思いましたけれども。まあそれはいいですが、大学生の娘を持っている40歳の母親もいれば、親と同居しながら無職または非正規雇用で勤めている40歳の女性もいるというぐらいの格差が出てきてしまったわけですね。つまり、収入の格差もそうだし、家族の格差も出てきているわけです。

さっきも言いましたが、恋愛も減少しているのです。その理由として、結婚できる相手でないと恋愛さえもしなくなっているためではないか、というのが私の仮説です。それで今までの典型的な家族をつくるために必死に

努力しなければいけなくなった結果が、「就活」と「婚活」になっているわけです。

そうなってくると、バーチャルなところに逃避が始まっているのではないかと私は思っています。これは「希望格差社会」に書いてあるのですけれども、地方都市に行って毎日単純労働をしている非正規雇用者フリーターの人に「土日は何をしていますか」とインタビューすると、男性ではほぼ9割の確率で「パチンコ」と言うのですね。女性でも結構います。つまり、仕事では努力は報われないし、だれも評価してくれないし、昇進もしないけれども、パチンコはたまに努力が報われるのですよ。ご存じの通り、パチンコは目がそろとう玉がたくさん出てくるわけで、たまに努力が報われてしまうのですね。だから、私はパチンコが日本の犯罪率を低めているのだと常々主張しているのです。つまり、他の国であれば、やけになって暴動を起こしたりするのですけれども、日本にはパチンコがあるおかげで、ある程度は努力が報われるという体験をしており、結果として暴動等の行動に向かわなくて済んでいるのではないかと思っています。

ところで、香港でメイドカフェがあったので私も行ってきたのですね。あれは楽しかったです。私は日本ではメイドカフェには行ったことはないのですけれども、香港で初めて入ったら、「Japanese?」と訊かれて、日本人だと分かったらしく、たどたどしく「オカエリナサイマセ」とか、帰るときには「イッテラッシャイマセ」とか、言ってくれるのです。香港のメイドカフェは、あまりサービスはなかったですが、日本のメイドカフェは家族の代わりだと思いましたね。

ゼミの学生で「妹カフェ」にはまったのがいたので、「妹カフェというのは何だ」と聞いたら、ホットパンツにTシャツ姿の女性がいて、ドアをあけると「お兄ちゃん、お帰りなさい」と言ってくれるんですってね。そして、死ぬほどまずいコーヒーを1杯500円とか1,000円で飲まされて、それで帰るときに「お小遣い」と言ってたくさんふんだくられるらしいのですけれども。それを聞いたときに、「息子カフェ」はできないかと思いましたね。イケメ

ンのお兄さんをそろえていて、中年の母親の人が入ると「お母さん、お帰り。疲れたでしょう。きょうは僕がお茶を入れてあげるね。何かいい」とか言って展開すると、もうかるのではないかと思います。大学の先生をやめて「息子カフェ」をやってみようかなとか一瞬思ったことがありますが。そういえば、「妹カフェ」にはまった彼には、実は本当の妹がいるのですよ。本人に聞いてみたら、「妹はおれにお茶の一杯も入れてくれるわけではないですから」と言うのです。そう考えてみると、「妻カフェ」というものがいわゆるキャバレーとかクラブとか飲み屋ですよ。妻の代わりに、飲み屋の女将やホステスがやさしくしてくれるわけですね。だから、「息子カフェ」とか「夫カフェ」があればいいなと思ったのですけれども。

さて、話をもとに戻して、典型的家族を形成・維持できなかった中高年がどんどんふえてきたときにどうなるかと言うと、日本の社会保障はもたなくなるのです。日本の社会保障は、家族が存在することが前提になっていますから。最近はずますます家族に押しつけようとする傾向が強まっています。でも、現実には家族がいない中高年がどんどん孤立化してきて、50年後には引き取り手のない死者がたぶん年間50万人ぐらいいるのです。そういう話を海外の人にすると、「日本は何も対策をしなくて大丈夫か」というふうに関心されてしまうのですけれども、私は「大丈夫ではないと思います」と答えています。今は、海外に活路を求めて国際結婚する日本人女性の調査をしているところです。

ちょっと時間をオーバーしましたが、これぐらいで私のとりあえずの話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

Part2：質疑応答

【吉田】 私の親しい友人にこういう人がいるのですね。それで、ここに書いてありますけれども、三高なのです。先生もご承知かと思いますが、三高といいますと、もう高学歴、高収入、高身長、最近はそれに高尿酸血症というのが入りまして、いわゆる通風ですね。今、四高なのです。そういう男性が実はおりまして、結構女性からの期待には十分応えられるのではないかと私も客観的に見ているのですよ。でも、そいつの考えはこうでして、やはり「愛は経済合理性には基づかない」というふうに考えているのです。やはり愛があってこそ結婚で、それがあってこそ子育てでなければ長期的な信頼関係はやはりできないのではないかと、それがやはり家族だというようなことで、福山の「家族になろうよ」という最近はやった歌にもありますように、「100年経っても好きでいてね」と、やはりこの世界ではないかというふうにそいつは言うのです。いろいろ聞いてみますと、でも、確かに最近は自由恋愛市場も発達してきて男女交際も自由になって、確かに恋愛と結婚というのは別という価値観が出てきているので、僕みたいにやはり世界の中心で愛を叫ぶような価値観というのを維持する人というのはやはり独身になってしまうのかなとか、そんなことを言うわけですよ。

そいつ、ちょっとは勉強していますので、でも、やはり家族の本質というのは婚姻関係にあるのではなくて、昔、吉本隆明ですか、彼が言った「対幻想」という男女の2人の心や意識、観念の共同性にあるのではないかと、難しいことを言うのですよ。それでやはり対幻想を幻想で終わらせていいのか、あるいは今後やはりそういうものというのは尊重されるべきではないか。彼はそんなことをのたまわっているということとでございます。このあたりのところに対して先生はどのようにまずお考えになられるのか。これはどうしましょうか、ひとつずつ聞いた方がよろしいですかね。

では、済みません、まず質問1、私のよく知ってい

るある高収入中年男性のケースを踏まえてちょっとコメントをいただければと思いますが、よろしくお願いします。

【山田先生】 もちろん、そういう「対幻想で」と言う男性もいると思います。そういう男性は、ヨーロッパやアメリカに行けば自由な恋愛をして、結婚しないまま子供ができてしまったりする可能性も十分あるのですけれども。

こういう高収入の男性たちが日本における恋愛で難しいのは、女性と付き合っていて、「結婚してくれ」と言われたときに、ガンと断って別れられるかどうかということなのですよ。結局、別れ方がうまいかどうかかなのです。

とにかく多くの女性は結婚という形で保障と安定を求めるので、こういう男性は日本に留まっていますが、自由な恋愛はなかなか難しいでしょうね。もっとも、このような男性はマクロな統計を動かすほどの人数はいません。20歳～40歳までで1,000万円以上の年収を稼ぐ男性は全体の0.7%ですよ。この0.7%が全員結婚して0%になったからといって、大勢を動かすほどではないということですね。

一方で、日本では結婚したら4分の3の家庭において、女性が財布を握るのですよ。だから、いくら高収入であっても女性に財布を握られてしまったら、自由に使えなくなってしまうので、結婚を先延ばしにし、ためらう男性は結構いますよね。

この前、私の知り合いの女性がある高収入の男性と結婚したので、彼女から付き合いの経緯を聞いてみましたけれども、この結婚において何がネックであったかということ、相手の男性が親に「交際していいか」とかいちいち意見を求めたということです。また、どこに行くのも全部母親の意見を求めたそうです。でも、最後にどんでん返しでよかったのは、さすがに親も高齢化してきて意見が言えなくなったとのことでした。息子が30代の時は母親も70代で元気だったので、息子をコントロールできたけれども、さすがに自分が80歳



吉田寿氏

を過ぎてしまったら反対する元気もなくなったらしい
ということで、無事結婚しましたけれどもね。

【吉田】 そうですか、分かりました。

済みません、あともうひとつ、次のその2がありまして、またこいつがこういうことを言っているのですね。貧しくても愛があれば結婚するのではないかと言うのですね。山田先生のご主張で、ちょうどこれは「少子社会日本」というこちらの方に書いてあった、済みません、ちょっと先生の書かれた内容を引用させていただきますと、「私は、結婚に関して経済決定論者だと批判されることがある。何人もの年長の研究者から、『好きだったら、貧乏になっても結婚するはずだろう』と言われたが、そうではない。…（中略）…『好きでも結婚する必要がない状況』が出現したのだ。好きでも結婚する必要がないので、『結果的に』、結婚は経済問題となる。」とたしか書かれていらっしゃるのです。

済みません、それでこの彼は、これは違うと思うと、こういうふうには言っているのですね。男女間の刹那の情動がその起点となることは確かに多いということですね。やはり「手鍋下げても愛情があれば」と昔、言いましたけれども、これというのは結構今でも言えるのではないかと思うのですね。本当の愛がない時代だから「永遠に確かなもの」を求めて本当の愛を希求するなどという、やはり愛の戦士ですから、そういうことを言うこともあるのですね。「人間的な、あまりに人

間的な」関係を尊重するが故に結婚までに至らないというような、こういった現実もひょっとしたらあるのではないかと、彼はそんなことを言っているのですが、先生、これについてはどうお考えでしょうか。

【山田先生】 いわゆる対幻想や恋愛至上主義というものについては、そういうケースがあることは確かですが、全体的に言って、「愛があればほかは要らない」といった価値観は日本では浸透しなかったのではないかとと思っています。

一時、バブルのころでトレンドードラマがはやっていましたが、そのころドラマを観ていた若者は、今40歳前後になっているのですけれども、ドラマに影響された結果あまりにも純愛の基準が高くなりすぎて、逆に結婚できなかったような気がしますね。

欧米を見ていると、対幻想で好きになった人と一緒にしなければというケースはたしかにあるのですけれども、一般的にはお互いにより完璧さを求めないという感じがしますね。だから、恋愛の価値観自体が違ってくるような気がします。

また、日本では恋愛感情よりも、結婚生活を長くやっていける相手がいいという感情の方が勝っているような感じがしています。今の若い人がなかなか恋愛しなくなった背景としては、そうした理由が大きいような気がします。そのかわり、日本では、対幻想がバーチャル化しており、メイドカフェ等が発達したのだと思うのですよ。

私は、たまたま「2.5次元」という男性アイドル追っかけを元ネタにした小説を読んだのですけれども、追っかけの人にとっては旦那がいても結婚していても「私の恋人は嵐の何々君」という感じなのですね。そのアイドルから見詰められるとキュンとするし、そのアイドルのことを思っているだけで「一日中幸せ」なのです。そうになると、結婚相手とは、一緒にやっていける友達や兄弟のようなものなのですね。つまり、家族と恋愛を本当に分けているのですよ。結婚相手とは、生活のパートナーであり、いざとなったときに何かし

てくれて居場所でもあるような人で、別に対幻想ではないのですよね。ですから、面倒を見てくれる相手は親でもいいし、子供でもいいし、兄弟でも何でもいいのですけれども、日本は結婚するのが手っ取り早いので結婚相手にそうしたことを求めているわけです。そして、女性は結婚してもしていなくても、韓流ドラマのスター等の追っかけというかたちで対幻想を求め、男性はAKBとか風俗産業とかキャバレーというところに対幻想を求める、というかたちみたいですね。そういう傾向が最近、ますます強まっているのではないかと考えています。

それで、私は「少子社会日本」の中に書いたと思うのですけれども、すべて日本の家庭は子供がネックとなっています。子供をみじめにさせない、ということが日本の親の最大の目標なのです。たとえば、お金が理由で子供に何かを買ってあげられないとか、お金が理由で子供を大学に入られない、という事態になるぐらいだったら、そもそも子供を産まないという選択をするのですね。子供を惨めにさせないという動機づけがすごく強いので、離婚に関しても「子供がいるから離婚を控える」というケースが多いですね。

実は日本はセックスレス率がすごく高いのですね。それでも家族を維持するのです。むしろ、セックスレスでも仲がいいというケースがすごく多いのです。だから、結婚相手が友達になってしまったというケースもあるし、もう仲良くはないのだけれども、子供のために別れないというケースもあるのですけれども。そういう意味で、いろいろなバーチャルな相手との対幻想と現実の生活を分けて考えるというのが最近の傾向ではないのでしょうか。

これに対して欧米の人々は行動と価値観を一致させなければいけないと思っているみたいで、不倫率とか性風俗率はすごく低いのですね。日本だと、風俗に行くことはある意味で当たり前のようにも思えますし、実際に調査すると未婚男性の風俗に行く率は10数%あるのですよ。これに対して、イギリス等プロテスト

ト諸国では1~2%であり、風俗に行く人はちょっと変な人と認識されているのです。欧米人にヒアリングしてみると、「普通に誘えば別にお金をかけなくても好きな女性とセックスを楽しめるのに、何でお金を払わなければいけないのだ」と言う人もいますし、「やはり愛と性は一致していなければいけないのだ」と言う人も多いわけですよ。恋愛や愛情と性欲処理を分けて考えられるというのは実はとても日本的な考え方なのです。欧米でそういうことを言ったらとんでもない非倫理的なやつとみなされてしまいますよね。

【芝沼】 次もある女性のケースということで、だんだん読売新聞の人生相談みたいになってきていますが、先生のご本の中や、講義でお伺いした非婚化の原因というのが経済的なものが一番にあるということなのですが、私の実感として、先生のご本や他の本を読んで、ああなるほど、日本の社会というのはそういう社会なのかと思う面はあったのですけれども、まず最初に先生のご本を読んだときにちょっと違和感があったのは、実感としては本当にみんな結婚したくて、でも経済的なことがあるから結婚しないのだというのがちょっと違和感を感じた部分です。感覚的にはやはり現代においては結婚というのが多様なライフスタイルの選択肢のひとつになっているのではないのかという感覚が私にはどちらかというとありまして、その背景としては、たとえば私の親の世代というのは本当に当たり前に結婚をする、結婚せずに生きる手段がないというような形だったと思いますし、私の母親も専業主婦でして、母を見ていると、自分のための時間とか、自分のために生きているという感覚はまったく皆無でして、家族のため、夫のため、子供のために自分の人生を捧げてきたというような生き方で、それ以外の別の選択肢も考えたこともないし、それ以外の生き方はたぶんできなかったであろうと思うのですが、母などを見ていると本当にそれで楽しいのか、生まれてきた意味があるのかなと、産んでもらっていながら思うのですね。

そういう母親に育てられてきたので、私としてはす



芝沼美和氏

ごく尊い生き方だと、母はすごいなと思うのですが、私はそういうふうにはできないと個人的に思っ
てきて、今の現代社会では別に結婚しなくても、私自身それほど周りからプレッシャーを受けたと、まあ鈍感なだけかもしれませんが、感じずに来たつもりですし、やはり個人として多様な選択肢を選択することがそれほど非難されないような社会なのではないかというふうに感じています。自然の欲求として家族を持ちたいと本当にみんな思っているのかな、その感覚がちょっと私には分からない。それよりは周りが求めているからとか、社会的責任として、日本のためとかということは考えているか分かりませんが、社会的責任として家族を持つという感覚があるのか、その辺がちょっとよく分からず、自然に家族を持ちたいとみんな思うのかな、そういうビビッドな感覚というのは薄れているのが現代社会なのではないかなと思うのと、あと家族を持つことによって自分のための時間やお金等、そういったものは当然なくなるわけですので、そこまで自己を犠牲にして家族のために捧げるとい
うか、そういうことが男女ともにやはり選択肢として優先順位が低くなっていくということもあるのではないかな。マクロ的な大勢の方がそう思っているかは別問題として、昔よりもそういう自分のために生きたいと思う人がふえてきているのではないかなという感覚があります。仕事や趣味、自己啓発等、個人の人生でい

ろいろ実現したいこと、追求したいこと、海外旅行等も行こうと思えば行ける社会ですので、そういった中でお金、時間、体力をどのように使うかと考えたときに結婚する、イコール家庭を持つという優先順位が低くなるのが現代社会においてはあるのではないかと私自身は感じていたので、その辺について先生のお考えをお聞かせいただければと思います。

【山田先生】 確かに、結婚に対する当座の優先順位は低まっていると思いますが、私は孤立を避けるというのが人間の基本的な欲求だと思っています。結婚している人は孤立していないですし、現在結婚していない人は日本ではほとんど親と同居しているので、やはり孤立していないのですね。結局、自由に趣味を追求できるのも、実は孤立していないからなのですね。確かに、ある程度の孤立が好きな人もいますが、自分の人生をだれにも分かってもらえない、認めてもらえないという状況が好きだという人はあまり見たことがないですよ。

幸福度の調査をしても、ひとり暮らしの人の幸福度は低いという調査はいくつも出ています。ですので、パチンコで孤独を埋めようとしても、なかなか埋められるものでもないというふうに思っています。また、仕事については、自分がやっていることを認めてくれる仲間が職場にいるという人はそれで代替することもできます。もっとも、代替というよりも、そういう人が引退したらどうなるのかなという恐怖はあると思いますが。

そして、自分を認めてくれる、自分の人生を肯定してくれるために、一番手取り早く、一番多くの人がとっている方法が家族をつくるということなのですね。ですので、内閣府の調査でも女性が結婚したい理由で、「老後にひとりは嫌」という選択肢は2番目に回答が多かったですね。40%の人が老後にひとりは嫌だから結婚するのです。たしかに、もしも配偶者が亡くなったとしても子供から感謝され、「立派だったね」と思われながら死んでいくことができるということが人間にと

って必要だと思います。つまり、社会の中で最も信用できる社会的関係が「家族」だと思うのですね。

【芝沼】 ちょっとすみません。追加でひとつ質問させていただいてもよろしいでしょうか。

私もひとり暮らしを5年ぐらいしてきたのですが、最近では、じゃあ土日、何をしているのと、パートナーがいなくて土日、私の年代だと結構みんな結婚して家庭を持っていますのでいわゆる同年代の友達とかあまり遊べる相手はいないという状況だったわけなのですが、土日、ひとりできてつまらないとか、何をしていると言われることはありましたが、私自身は本を読む時間があるとか、そういう感じで、最近ではたとえばSNS等、ITで世界の人とつながるといえることができるので、ひとりでもずっとパソコンの画面を見ているとみんなと一緒にいる気になる。これは先生がおっしゃるバーチャルなのかもしれませんが、そういう感覚を私自身が持っていたので、逆に今後、そのようなITの普及によってより家族がいなくても平気な社会になるのではないかなというのが、追加でお聞きしたい質問です。

【山田先生】 実は、私も山小屋にひとりでこもるのがすごく好きなのです。でも、居場所がないと思ったことはなくて、私を大切に思ってくれる人はいるはずだと信じていることができればいいわけです。毎日「あなたは大切だよ」と言わなくてはいけないというのは、逆に不安だから言っているわけですね。今の若い人がつながっていなければ不安だというのは、逆に本当につながっている人がいないからではないでしょうか。信頼できる人がいないから、常に自分に対して反応が返ってこなければ不安だということではないでしょうか。逆に、一番幸せなのは、「自分は妻と子供に愛されている」と信じながら亡くなっていく高齢男性ですね。家族は裏ではゴチョゴチョ言っているながらも、「かわいそうだから立てておいてあげようか」とか、かたち上だけ信頼しているふりでもいいわけですね。信頼している人がいるという感覚が、アイデンティティなり



山田昌弘先生

居場所があるという感覚を生むわけで、現実にはひとりでいる時間が長いか長くないかということはたぶんほとんど無関係だと思います。現実にはひとりでいられない人の方が、逆にそういう信頼できる関係を持っている確率は高いかもしれないですね。

【芝沼】 ありがとうございます。

次に移らせていただきます。ここからが非婚化ではなくて、われわれのチームは非婚化と少子化を分けて考えようとしています。少子化の原因に対する質問をさせていただこうと思います。先生のご講義にも多少触れられていた部分ですが、欧米との比較です。欧米と比較して日本の問題が深刻度が高いように思われるのはどういった原因があるのかという点からの質問です。日本の社会が非常に寛容性が低いということがひとつ原因にあるのかと考えまして、アメリカやフランス、スウェーデン等は多様なパートナー関係がある。これは先生のご本や講義にもありましたが、その多様なパートナー関係というのは、たとえばフランスではパックスという民事連帯契約があって、これは結婚よりももう少し軽い法的な社会保障があるという制度らしく、同性または異性の2人組がこういう契約を結ぶ。そうすると、病気になったときや相手が亡くなったときになんらかの保障があるというようなものなのです。スウェーデンでは、同性婚は認められていないらしいのですが、同性についてはパートナーシッ

ブ登録で同性同士のカップルが法的に保障されているというような制度があって、このような制度から見ても、当然婚外子に対しては寛容になりますし、パートナー関係も法律婚だけがすべてではなくて、日本に住んでいると少し理解しにくい複雑な面もあるかとは思いますが、非常にいろいろな多様な関係がある。一方、日本では非法律婚カップルや婚外子には制度的な差別が存在する。そういう制度的なものがあるから故かもしれませんが、非常に率としても少ない。同性カップルで法的保障を求める動きというのも実はあるらしいのですが、われわれがそういったことをニュース等で触れるケースはほとんどなく、どちらかというタブーというか、そういうことはまだ社会的に表向きにできないような状況であると言えると思います。そういう意味で非常に典型的家族かそうでないかの二択を迫られている日本社会という、そういう社会的な寛容性の低さがまた、どちらか、典型的家族になれないならもう家族を持つのをあきらめるという形で少子化を促進しているのではないかと思います。

フランスに関しては母子関係に非常に距離があって、親子がそれほどべったりしていない、夫婦関係が密接、これは先ほど先生がおっしゃったように欧米では性と愛が一致しているというようなことも関係してくるのだと思いますが、強固な夫婦関係がもとになって家族というものが形成されているので子育てに関しても非常にドライで、母親がすべての責任を負うということもないので、非常に母親が伸び伸びと子育てを楽しんでいる、子育ても仕事も楽しんでいるわよというフランスの女性が多いというデータを見ました。

そういったことを可能にする社会的な状況としては、労働時間の抑制、日本みたいに残業時間がそれほど多くない、フランスの男性はほとんど午後7時には家に帰っている。7時には帰って家族と一緒に夕食をとるという率が非常に高い。それはもう今に始まったことではなくて昔からの考え方があるということと、保育学校ですとか豊富な家族手当とか、そういった子育て

に過剰な負担がかからないようなシステムが整っているという制度的な面もあるということで、そういった社会的な寛容性があるからこそこういった制度もできて、家族が多様化しながらも家族は解体せず出生率を維持しているという背景があるかと思うのですが、やはり日本には伝統的家族であらねばならないというような社会的な圧力があって非常に生きにくい世の中になっているのではないかと思います。これでご講義を聞くと先生もお考えは同じなのかとは思いますが、いかがでしょうか。

【山田先生】 もちろんそうなのですが、パックスとか、同性カップルの制度を日本でつくったとしてもたぶんあまり選ばれないのではないかなと思いますね。日本では、実はアジア全体の特徴でもあるのですが、先ほどもお話しした通り、できちゃった結婚率がすごく高いのですが、欧米のキリスト教社会においては「結婚」という制度が心理的にも結構重い存在なので、「結婚せずにとりあえず一緒に暮らしてみよう」ということになるのです。けれども、日本では逆に「結婚」の位置づけが軽いのです。オランダに行ったときにオランダ人と論争になったことがあるのですが、でも、「日本人は何で別に結婚しなくてもいいのに結婚するのだ」と言うので、「じゃあ何でオランダの人は結婚してもいいのにしないのだ」と言い返してしまいました。日本では結婚しない方が面倒くさいので、結婚



を選んでいるという側面もありますよね。たとえば、結婚しないと、結婚しない理由を周りに説明しなければいけないとか、結婚の手續が面倒だとか、いろいろありますので、結婚してしまった方が楽なのですね。一方で、欧米では結婚しない方が面倒くさくないのです。ただ、それぐらいの差だと思うのですね。

同性カップルについてですが、日本では同性カップルを法的に保障する場合に、養子縁組をするという手があるので、あまり社会的な運動にはなっていませんね。「法的に認めろ」と言う人もいますが、法的には親子関係の方が婚姻関係よりも強いので、同性カップルは養子になっているケースが多いですね。もっとも、付き合っている同性カップルの誕生日がたまたま同じという場合は養子縁組はできませんけれども、それでトラブルになったという話は聞いたことがあります。養子になれば、扶養家族にもなれるし、遺産も相続できるのです。欧米はそういう手がまったく使えないので、法的に保障するには結婚するしかないので、社会的な運動も起こるのです。日本は逆に同性愛に寛容であったがゆえに、社会的な運動は起こりにくいのですよね。

ご存じの方も多いと思いますが、戦国武将の例をとって上杉謙信、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と4タイプあって、たとえば、上杉謙信は純粋なゲイだったので、女嫌いで女性は一切だめで子供もいなかった、と説明されます。また、織田信長は本当は男の方が好きなのだけれども、しょうがないから目をつぶって女性と結婚して子供だけつくったとなります。そして、豊臣秀吉は女好きなのだけれども、男ともたまにしたそうです。さらに、徳川家康だけは男嫌い、で、戦場に行くときも若武者を使わずにその土地の農家の娘をお伽に召し上げた、というような話です。昔から日本はそれぐらい同性愛に対しては寛容だったのだ、という話ですけれどもね。

【中谷理事長】 今のことに関連してひとつ質問したいと思います。パックスのような制度を導入しても、日本



中谷蔵理事長

ではあまり利用されないのではないのかというお話については、私もそうだと思うのです。一方で、山田先生が、結婚していようがしていまいが、子供ができた場合には国が責任を持ってちゃんと手当てしますという資金をどこかでつくりましょう、というような話をたしか何かの本に書いておられましたけれども、生活が苦しくなるという理由から、あるいは子供が生まれてもちゃんと教育を受けさせられないのではないかと、という理由から子供を産まないのだというのであれば、家族手当、または親子保険のような制度を創れば、子どもの数は増えるかもしれませんよね。

【山田先生】 はい、そうだと思います。私の友人の研究者で母子家庭で育った子供がどういう思いをしているかという調査を行っていますが、「辛かったことは何ですか」と尋ねたら、差別とか人の目よりも、やはり「家の収入が少なく、ほしいものを買ってもらえなかったことが一番辛かった」とかいう回答が一番多かったということです。これも家庭の経済問題だと思っています。一方で、フランスでは母子家庭であっても、子供を3人生めばそれだけで働かなくても生活が普通にできてしまうのです。

ところで、できちゃった結婚について欧米でよく聞かれるのは、「子供ができたから結婚するというのは、日本の男性はやさしいのだな」ということです。欧米だと「子供ができたからって、男は普通、結婚しない

ぞ」と言っていましたね。結婚したくなくても、子どもができたら結婚してしまうのが、日本の男性のやさしさなのだな、と言われました。

【上野】 それでは、質問5に移らせていただきます。これはメンバーで話したときに皆から出た話なのですが、代表して質問させていただきます。先ほどの質問と少し似ているところもあるのですが、子育ての重圧が母親だけにかかっているところが日本にはあるのではないかと話が出ました。実際に子育てに携わっているメンバーからも出た話なのですが、確かに日本にもファミリーサポートセンター等はあるのですが、今おっしゃったように子供がいれば豊かに、普通に暮らせるということはなかなかなかったり、ベビーシッターやナニー等、高収入層も低収入層も気軽に使えるような子育て支援サービスがなかなかそろっていないのではないかと思います。また、家族の関係や親戚関係が、特に都会だからということもあるかもしれないのですが、全般的に希薄になってきている中で、母子関係だけが今異常に濃密化しているのではないかと意見もありました。“何とかちゃんママ”とか、“何とか君ママ”等と呼ばれて自分の名前も呼んでもらえないお母さんが自我を喪失していったり、子供と自分だけの閉じられた空間で孤独になっていって受験に熱心になって育児ノイローゼになるといった、



上野裕子氏

ドラマだけかもしれませんが、母親への育児の責任の負荷というのは今非常に重いのではないかと思います。立派な孫に育ててほしいプレッシャーとか、そもそも孫が欲しいプレッシャーとか、そうした育児の重圧も少子化の原因になっているのではないかとこの意見がメンバーでの話し合いであったのですが、いかがでしょうか。

【山田先生】 そうですね。先進国の中では日本とドイツにおいて「母親はとにかくこうあらねばならない」という規範が強いので、日本とドイツでは少子化している、とよく言われます。これをなくすことはどうやったらできるのだろうかということはすごく難しいことです。変えていくには、もう20年、30年は必要かもしれないですね。

【美濃地】 さっきのはサラッと行きましたけれども、次に行きます。

パソコンを打ちながら、会社でこんなのを打ったことがないのでええっという感じでしたけれども、この場で言うのもちょっと恥ずかしいのですが、さっきのお話でちょっと出たなという気がいたします。それから、うちの吉田さんの方から話があった点で、あと男女交際の自由化とかいう話もあったので。そういう意味ではそれとちょっとかぶる質問かなと思いますけれども、橋下市長の話もそうですし、先生がおっしゃった中で言うと、ああそうかなと思ったのは、愛と性が一致しないという話がまさにここの現象としてあらわれていたり、あるいは寛容性という意味で言うと、こういう性風俗に関する寛容性というのは日本は非常に欧米に比べても高いというようなことで、われわれの少子化の原因として指摘してみたいと思ったのは「抜け道」の存在というか、あまり公式には語られないというか、語りにくいテーマなので語られていないだけで、実際にはここの比率とかウェイトというのもそれなりに原因としては大きいのではないかとこのことが考えなのだと思いますけれども、先生のお考えをお伺いできればと思います。

【山田先生】 私もそう思います。もっとも、どちらが原因でどちらが結果なのかの判断は難しいところですね。風俗があるから結婚しないのか、結婚できない人がもっぱら風俗を利用しているのかという、原因・結果は特定できないのです。ただし、風俗が存在することによって、女性と付き合うモチベーションが下がるということは言えると思います。また、ポルノについても同じようなことがよく言われます。たとえば、韓国では未婚化、少子化が起こっているのですが、風俗規制やポルノ規制がすごく強く、性犯罪率は先進国ナンバーワンの高さなのですね。また、アメリカは自由の国のように言われますが、ご存じの方もいらっしゃると思いますけれども、おとり捜査等もあって、性風俗やポルノはすごく規制されており、一方で性犯罪も多いのです。むしろポルノ規制が緩やかなヨーロッパや日本の方が性犯罪率は低くなるのですね。こういうことがあるがゆえに、性風俗やポルノがあることで、若い男性の性的なモチベーションが低下するということは確実にあると思います。もっとも、この問題は少子化とはあまり関係ないと思うのですが。

【美濃地】 ありがとうございます。そういう意味ではそういう要素もあるのかなということは、原因と結果についてはわれわれもよく分らなかったのですけれども、ありがとうございました。

次に移らせていただきまして、これもそういう意味ではNHKが特集したりとかいろいろあるような気がしますし、子供がなかなか産まれないひとつの原因というのはあるのかなというふうに思いますが、最初に思ったのは、先生のご著書の中であまり触れられていなかったような気がしたのですけれども、結局妊娠中絶が非常に件数として多いので、要は経済的理由とか何かで生まれる前に命を閉ざされる子供たちを何とか育てる仕組みさえあれば、ある程度出生率も回復したり少子化もとまるのかなと思ったのですけれども、そういう意味で中絶件数を過去数年調べてみると、中絶件数自体も減っていますので、それは結婚適齢期とか、



美濃地研一氏

出産適齢期の女性が減りつつあるという話とも同じなのかもしれませんけれども、ただ実施率、パーセントで見ても中絶の率は下がっていますので、そういう意味ではそもそも子供が生まれる確率というか、これは男性も女性もですけれども、生殖能力が低下しているということも少子化の原因のひとつなのかなと。ただ、これは医学的にもいろいろな問題があると思いますので、統計的にこの中絶の件数だけでそうかと言うのは難しいと思うのですが、そういう要素も重視すべきではないかなというのがこちらの質問です。

【山田先生】 私は、20年ほど前に中絶の調査もしたことがあるのです。昔の日本、たとえば1950年代は中絶件数が年間100万件を超えています。つまり、未婚の中絶ではなくて既婚者の中絶だったのですね。実はかつては子供が200万人生まれる一方で、100万人が中絶されるという時代があったのですけれども、避妊の意識がだんだん普及してきてここまで低下したというのが現実です。最近、若年者の中絶は平成7年からふえていますけれども、これが今度は逆にできちゃった結婚の増大によって相殺されてきているのですね。つまり、20歳前や20代前半のできちゃった結婚率が50%もあるのですから。逆にできちゃった結婚が許容されてくるに従って、未婚者の中絶もふえています。だから、それでも中絶をするというのは、やはり経済的理由が主なのかなと思います。

一方、日本では養子や里親の率がどんどん低下しているのですよ。つまり遺伝子信仰が強くなってきてしまっ、自分の遺伝子を分けた子供とかおなかを痛めた子供じゃないと信用がおけないというような意識が強くなっているのじゃないかな。欧米では養子や里親が多いのに、日本では昔多かった養子がどんどん減ってきているということが、日本の少子化を促進させている背景のひとつだと思います。私は児童福祉委員会の委員をしたことがあるのですが、今は、施設にいる子の里親を探すことがとても大変になってます。

【美濃地】 ありがとうございます。

少子化の原因の次は、今度は日本の家族のあり方ということで、これが本題というか、本来は一番お伺いしたいところではあるのですが、われわれもこのところについては100年後の日本の家族の姿ということを書いているのですが、非常に苦慮してまして、本当にどうなのかさっぱり分からないところがあるところなんですけれども、先ほど来、先生のお話を聞いておりますと、冒頭にありますような、他人が疑似家族のように暮らす形態というのは確かに2.5とか、それからいろいろな形でそういうふうに家族が変わってきているのかなというのは先ほどのお話でも共感したところなんです。具体的な例で言えば、シェアハウスとか、グループホームもある意味、最後は疑似家族的なものなのかな、そうではないものもありますけれども、そういうふうなものもあるなというふうに思っておりまして、それこそドラマとかで着目されるのはやはりシェアハウス。ただ、若い人がそこで何かいろいろな出来事が起こる舞台としてのシェアハウスが中心なのだと思いますけれども、それだけではたぶんすべてが充足できるわけではなくて、アイデアとしてあったのは年代ごとに、20代とか30代の比較的若い世代、それから50代、60代とか、あるいは老年期のシェアハウスとか、そういうものが順番にあって、それを転々とテンタティブに、要は一時的にそこは居心地がいいのというような気がするの、年を経るとまたちょっと違う、自分たちと同じような年代層のところに

次々に移っていくような形であれば気持ちよく住めるのではないかな。20代ばかりいるところに80代がずっといてもおかしいなというような感じがしたので、そういうふうなものが求められるのではないかなと思います。

あと先ほど養子が難しいというお話もありましたけれども、場合によっては新興宗教の集団生活であったり、任侠の世界とか何でもいいたいですけれども、兄弟、家族のような形で血縁関係がない人間も受け入れる社会というのも多少希少性はあるにしろあるのですが、それがこれから拡大するかと言えばさっきの先生のお話、養子縁組は難しいというお話で、それも難しいと思うので、やはり擬似的な家族としてのシェアハウス、グループホーム的なものが要るのかなというふうに思っております。

【山田先生】 シェアハウスとかコレクティブハウス、グループホームに関しては、平時のときは特に問題ないのですよ。でも、結局人が心配するのは、いざとなったときのことなのですね。たとえば、はたして自分が失業したときに仕事を探してくれるのかとか、本気になって助けてくれるのか、とか、自分の子供が大学に行くようになったときにお金を出してくれるのか、といった点です。一方で、シェアハウスを一緒にしている人に「子供が大学入学だからお金を出して」とは言えないのですよね。しかし誰も、いざとなったとき、何かが必要となったときに、自分を犠牲にしても何かしてくれるような存在がいると信じたいわけです。日本では社会保障が貧弱で、いざとなったときに国は絶対に助けてくれないので、それを当てにしていたらひどいことになってしまうわけです。ですから、いざとなったときに自分のために動いて助けてくれる人が欲しいので、結婚したり、自分の血を分けた子供を生んだりして、家族を求めるといった感じでしょうか。つまり、日本における「家族」とは、いざとなったときのことを考えて、平時に安心して暮らせるための仕組みですから、それを代替するものがなかなかないのですね。逆に、北欧では、いざとなったときには国が経

済的には何とかしてくれると信じているので、同棲でも、その他のかたちでも、家族を気軽につくったり組み替えたりできるのですね。だから、日本がそういう社会に移行できるのかどうかという話ですね。

【美濃地】 高齢者が自宅を持ちながらときどき同居するファーストプレイス、セカンドプレイス、サードプレイスというような話は、そういう意味ではそれは大いにやっとならいいというか、持っている人というか、勝ち組の人というか、それらの蓄積とかある高齢者はそうやって楽しんだらいいという、そういうことですね。

【山田先生】 それは趣味のサークルのようなものですか、そういうかたちで生活している人もいます。家族の代わりになり得る唯一の存在は、強力な宗教集団ですね。いざというとき、たとえば、「失業して仕事なくて困った」と言えば、宗教ネットワークが「じゃあこの仕事を回してやるよ」というかたちで、同じ信仰を持っている人たちのためになんらかのことはしてあげるといことをやってくれるみたいですね。また、病気になったりしたら、同じ信徒の人がときどき来て見舞いしてくれるというように、結構安心して暮らせるのですね。今後はそういう宗教に入信する人がふえてくるかもしれませんね。

とにかく、人間というものは、最低レベルで孤立してしまうことだけは絶対に避けたいと思うもので、いざとなったときにある程度のレベルで寂しくない程度の関係は持っていきたいと思うわけですね。

【美濃地】 そうですね。集団生活というのは極端でしたけれども、そうではない宗教で一定の社会保障的なことをしてくれるものというのは、帰依する人がふえるかもしれないという。

確かにそういうときに宗教だとうまくやってくれそうな感じはします。

【山田先生】 宗教の場合も信仰そのものということではなく、信仰している人のことは絶対に裏切らないという保証があるので成り立っているものだと思います。

【美濃地】 続きですけれども、これも議論している中で



どうかなという、実際に技術革新の方が現実よりも先に進んでしまうようなところもあって、さっき先生が血縁をより重視する、遺伝子信仰という話もありましたけれども、それがちょっとプラスなのかマイナスなのか分からないのですけれども、自分の遺伝子を残して、それが自分が死んだ後とかに、30年後に解凍してそれで子供ができたというようなことがあり得るのではないかな。技術的にはたぶん可能で、そういう意味で言うと家族の概念というものが、それも先生のお話の中にあつたような気がしますけれども、血縁を持った家族が死後、突然新しくできるというふうなことも考えられるなというふうな話はしてしまっていて、どのぐらい家族の概念というのは考えたらいいのかなという話をしておりました。

【山田先生】 今は子供を残せなかったけれども精子を残しておき、この精子を使って妊娠した子供に遺産を残す、ということは現実的にも起こり得るでしょうね。将来、自分の血を分けた子供にとって自分はすごく大切な存在になるのだ、私に感謝してくれるだろう、という意識を持ちながら静かに亡くなれるわけですね、きっと。

【美濃地】 もうこれで最後の質問ですけれども、社会保障のシステムは破綻しているなというのはなんとなく肌感覚としては分かるのですけれども、たぶん専門家の方とか分かっている人は分かっているのだと思うのですけれども、放置されてきたなという感が否めなくて、先生は審議会とか内部の事情もお詳しいと思うの

で、なんでかというところを先生のご回答がいただければいただきたいと思います。

それから、もうひとつの質問は、コネとかが横行してしまうという話は生々しいので書けないというふうに書籍の方にあったのですが、これはこの場ではちょっとやめた方がいいかなと、以上2つです。

【山田先生】 「高学歴ワーキングプア」の共著者の塚崎先生はもともとみずほ銀行に在籍されていて、そこから研究者になった人です。私は大学の世界にいて、よく分からないうちにいろいろ外の世界に引っ張り出されたのですけれども、塚崎さんと2人で「大学は変だ。大学の非常識はいっぱいある」という話をしたことがあります。たとえば、「なんで教授会で教授が1時間も演説をぶつのだ。そんな時間があったら研究させた方がいいだろう」と思うのです。そういう大学の常識は世間の非常識という点について、塚崎さんと2人で書こうという案もあったのですが、いまだ書けません。

先ほどの「こんなに、みんな分かっていて、みんなおかしいと思っていることがなんで実現しないのか」という質問に関しては、私はむしろ中谷さんにお聞きしたいぐらいです。私がある官僚の方に聞いたときには、「変えた方が全体でよくなることが分かっているのだけれども、ちょっとでも文句を言う人がいると、現状維持が続く」という回答でした。

私は、中高年パラサイトシングルは30～40年後に破綻する、と言っているのですが、だれも聞いてくれません。数十年後にどうなるかが、多くの官僚はほとんど心配はしませんものね。私自身も死んでいると思いますし。今のままでしばらく行ったら、大きな問題が起こるのが数十年後であったとしたら、まあほっとおいてもいいのかなと思います。数十年後に破綻が来ることはほぼ確実なのですが、みんな死んでいるから、今のままでいいや、ということです。何かちょっとでも言う文句が来るのであれば、さすがにすべての文句を一身に担って30～40年後の心配をしようという人は政治家にも官僚にもなかなか

いないということですね。私も勝手なことを言っているだけで、具体的に活動しているわけではないので。

【中谷理事長】 いろいろお話、ありがとうございました。

われわれ「巖流塾」では、100年後の日本について考えています。今、日本の家族というものも、先ほどおっしゃったようにパラサイトシングル等、たいていの人に目に見えるようなかたちでどんどんと変化していているわけです。けれども、たとえば、孤立老人の死亡者数は今は3万人だけれども、50年先には50万人になるという社会的な現実があるわけですね。しかも、副次的影響としては、その時代の老人も若者もみんな貧乏だからもうパラサイトはできなくなるわけですね。そうすると、先ほどの欧米諸国の例ですと、「では、しょうがないから2人で同棲して、とにかくコストを節約して何とか生きていこうか」というような家族形態になるのだと思います。または、婚外子でも社会がちゃんと面倒を見てくれて、子供を3人もつくったらフリーターでも左うちわ、という社会になるのかもしれませんが。このように、経済的に大丈夫だということになれば、日本の子供の数も増えて、人口減少がどこかの時点でとまると考えてもいいのでしょうか。

【山田先生】 私は日本の人口減少はどこかでとまるとは思うのです。けれども、悪いとまり方というものがあるのです。たとえば、中谷先生がおっしゃった通り、「もうパラサイトもできないから、しょうがないから2人で生活しよう」という状態なのですが、それが起きるときは格差社会ではなくて、確実に階級社会が来たときですね。今のできちゃった結婚はそういう状況に近いと思います。いわゆる中流の家庭の人は、中流なかたちで結婚していくのです。そこからこぼれた人は、今のアメリカでもそうですけれども、収入が低い人同士で子供もちゃんと育てられない程度の生活をしていくのです。その格差を再配分で埋めれば、ヨーロッパ型の少子化回復になりますし、それを再配分で埋められなければ、アメリカ型の高出生力社会になるわけです。アメリカが高出生力なのはまさに中谷先

生が言った通り、親にパラサイトできない低収入の人が寄り添って子供が生まれているからなわけです。つまり、ヨーロッパ型の回復の方が望ましいと思うのですけれども、もしかしたら日本はアメリカ型の回復になってしまうかもしれないという懸念はあります。

【西田】 話の流れを折ってしまって恐縮なのですが、私は今33歳で、去年結婚をしてまだ子供はいないのですけれども、ちょっと私の世代と私の周りの結婚をしている状況をよく夫婦で話をするのですけれども、今、晩婚化の状況は、最近すごく変わってきたのではないかと考えています。特に、ここ4、5年ですね、われわれの世代、30歳過ぎぐらいの僕の同期世代というのは、おそらく、半分ぐらい未婚なのですけれども、その下の世代はかなりの率で結婚しているような気がします。身近な例で恐縮なのですが、われわれの同期は、未婚や子供なしが多い一方で、大学のサークルの4つ下ぐらいの世代の後輩たちはみんな子供がいます。奥さんからも同様の話をよく聞くのですけれども、なんでそうなったのでしょうか。絆社会だとか、その社会の雰囲気によって、実はこの晩婚化というのは割と短期スパンで変わっているのではと思っているのですが、そのあたりの直近の動向は、いかがでしょうか。

【山田先生】 ここ2年ぐらいで、結婚の動向が変わっているかどうかと言われれば、マクロ的にはやはり変わ

っていないのですね。もっとも、需要の先食いはされているような気がします。つまり、私の提唱している「婚活」もそうなのですけれども、若い人の間で「結婚しなきゃ」という意識が強まってきて、収入が安定した男性だったら、収入がそれほど高くなくても早めに結婚という形でつかまえておこうという傾向が女性に確かに見られるような気がします。それがマクロ的にどれぐらいのボリュームになっているのかはちょっとまだ分からないのですが。

【西田】 直感的にも、逆に先生の話の通り、われわれ世代というのは結構結婚しているというのは割と双方高収入か、ある程度収入がどっちかが多いという状況が多いと思いますが、実は、そうでなくとも結婚する流れは出てきているように思います。その流れは、いろいろなところで起こっている気はしますが、マクロ的にとらえた研究はないんでしょうか。ここ5年ぐらいでそういう動きが出ていると感じているのですが。

【山田先生】 今後引き続き注目していきたいと思いますが、ここ1、2年では、そういうデータはでてきていないですね。もしもデータで現れてきたら、私の提唱した「婚活」のおかげと私は言おうかなと思っているのですけれども。

【太下】 ひとつ質問をさせてください。少子化や家族の問題とはちょっと別なのですが、それに関係する問題として、その家族が暮らすべき住まいの問題があると考えています。たとえば、今話題になっている「違法貸しルーム」や「脱法ハウス」等では、もともとは倉庫とかオフィス等、違う用途で建てられた建物を違法に住宅に転じているわけです。たとえば、スペース的には3LDKぐらいのところに12人ぐらい住むというような話があるようですが、これはある意味で、通常のアパートにも入居できないような人たち、つまりパラサイトシングルからもさらに外れてしまったような人たちが、そういう生活をしているという状況があるようで、国土交通省も緊急に調査を始めたようです。こういう住む場の貧困ということについて、先生とし



西田貴明氏



太下義之氏

ではどのようにご認識されているのかということについてお伺いしたいのです。また、これは根本的にはやはり経済問題に帰結すると思うのですが、こういったことに対して手を打つとしたら、公営住宅という手法しかないのでしょうか、といった点についても考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

【山田先生】 確かに、パラサイトできない、または親自体も壊れてしまったという若者たちがふえてきています。さらにシェアハウスの最近の傾向としてよく聞くことは、離別した女性が入居する率がすごく高いのです。つまり、女性ひとりでは家を借りにくく、かつDVの元夫に追っかけてこられるのは困るので、シェアハウスに逃げ込むというケースが結構ふえているらしいのです。シェアハウスがこうした女性たちの受け皿になっているのですね。逆に言うと、家族で住むかひとり暮らしをするかというどちらかの選択肢しか日本になかったことが、そもそもおかしいことだったのだと思います。今後の状況においては、公営住宅についても、コレクティブハウスのようなものを公的につくって運営し、家族ではない人が共同生活をするというような形もあっていいのではないかなと私は思います。もっとも、日本では1回住んだらそこにずっと住み続けるという意識が強いのですけれども、そうではなくて、一時的な居住の受け皿として、そういう公的な住宅を用意するという政策も必要ではないかと思っています。



小松創一郎氏

ます。

【小松】 先生のご著書でベーシックインカムと最後、述べていただいていますけれども、中流である私が読むと結局、それというのはいろいろなところを統合しても税源というのをふやさないといけないので、導入へのハードルというのが結構高いのかなと思っているのですけれども、そのあたりは。

【山田先生】 実現のハードルはたしかに高いでしょうね。仮に「高収入の人も全員同じ額をもらえる」と言っても、ハードルは高いでしょうね、たぶん。

私は、現在の生活保護制度のゆがみや年金制度のゆがみを直すためには、ベーシックインカムしかないと思っているのです。働いている人にも働いていない人にも同じ額を支給するベーシックインカムを導入してしまえば、働くことへのインセンティブにもなるし、変な不正もなくなると思うのです。というように私は思っているのですが、国民の心理的ハードルはすごく高いと思いますね。

【中谷理事長】 それでは、もういいでしょうか。きょうの講義と質疑応答はこれで終わりたいと思います。山田先生、長い時間にわたり、どうもありがとうございました。